

1. 子どもの権利条約を地域の中へ 高野経子（苫小牧総合経済高等学校）
2. それぞれの不登校 支援学級5年生～行きたくなる学校とは？「学校」を相対化する～
今川大海（釧路市立小学校）
3. 東本麻里（猿払村立鬼志別小学校）
4. A ちゃんと B ちゃんと私 鈴木真弓（江差小学校）

高野さんは「子どもの権利条約」を地域や生徒にわかりやすく伝えるにはどうすればいいかと考えた。その背景には家庭の貧困や虐待の実態がある。

生徒とともに子どもの権利条約を読み解く実践を続ける中で、生徒総会での意見が活発に出るようになってきた。しかし、生徒会を含めその意見をどうやって実現させるかが学校の課題となっている。そして現在は卒業式実行委員会を立ち上げ、学年全員の合唱などを企画している。また、模擬店の利益を活用した学年レクを企画したりと、「意見を表明する」ことをきっかけにした自治活動が進められている。

さらに市の教育委員会と懇談し、小中学校へ「子どもの権利条約」の連携授業も市内全域に拡大する予定である。子どもの権利条約の条例化は、全道でも約10市町村と少なく、高野さんは条例化を目指している。

今川さんは特別支援学級に通う子どもたちなりの「学校」への参加の仕方を探している。リクは給食の献立を見て登校日を決めている。「歩くのが疲れる」というリク。しかし、「運動会を頑張って、ミッションクリアでパーティーに参加しよう」という今川さんの提案でリクは運動会の練習も当日も参加する。宿泊研修のパークゴルフの練習や当日も「楽しかった」と振り返っている。リクの興味ある五感を刺激する行事に参加を促すために今川さんは、家庭へ迎えに行ったり、「ちゃんと準備や練習から参加しようね」と呼びかけている。また保護者の苦悩にも向き合い、人生を豊かにする学校とは何なのかを模索している。

アスカは身体を動かすのが好きだ。アスカが学校へ来れない困った状況は回りの友だちも理解している。遠足に来たアスカはオンラインゲームをしている友だちから声をかけられ安心した様子を見せている。ここで子どもがゲームの中で生きることを否定してはいけないと議論になった。子どもたちにとってはゲームを通して友だちとつながることが重要な場面があるからだ。今川さんは行きたくなる学校、ワクワクする学校を子どもや保護者と関わる中で追求している。

東本さんは「ゼロトレランス」や学校スタンダードに対して「生徒が自分で決められないのは悲しい」と苦しんでいる。学校スタンダードは各学校で批判的に見られることは少なく、「守られているか」と教員が逸脱するのは許さないという状況で、「仕方ない」ではなく保護者や同僚と話し合うことが重要だ。

鈴木さんはA くんやB くんに対して「全体指導が通らない」、「欠席が続くと、今まで積み上げた生活習慣などがゼロになる」などの課題をかかえ、一つひとつ丁寧な指導を行っている。そこで支援員やコーディネーターとの連携について議論された。職場での活用と、保護者も含めた協力体制が必要不可欠である。